



老子会のモットー

「老子の道の精神を生かし、自分を変え、世界を変え、未来を変えていく」をモットーに、世界平和・人類の幸福を推進していく。

老子



第48回老子会から

第48回老子会は2018年1月20日(土)15:00~17:00甲南大学6-33講義室で実施しました。

今回は『老子(道徳経)第66章』を学習しました。第66章の原文・書き下し・現代語訳・雑感下記のとおりです。最初に「老子クイズ」から始まりました。

老子クイズ

質問：日本人の【名】「老子」という方々がいます。どう発音しますか？

答え：【読み】おいご

質問：日本全国にどれくらいの「老子」人口がいますか？

答え：【全国人数】およそ70人 【全国順位】37,459位

質問：「禍(わざわい)は福の倚(よ)る所(ところ)。福は禍の伏する所。」第何章にありますか？

答え：第58章



原文

江海之所以能为百谷王者，以其善下之，故能为百谷王。是以圣人欲上民，必以言下之；欲先民，必以身后之。是以圣人处上而民不重，处前而民不害。是以天下乐推而不厌。以其不争，故天下莫能与之争。

書き下ろし文

江海(こうかい)の能(よ)く百谷(ひゃっこく)の王(わ)たる所以(ゆえん)の者(もの)は、その善(よ)くこれに下(くだ)るを以(も)って、故(ゆ)に能(よ)く百谷(ひゃっこく)の王(わ)たり。ここを以(も)って民(たみ)に上(かみ)たらんと欲(ほ)すれば、必ず言(げん)を以(も)ってこれに下(くだ)り、民(たみ)に先(ま)せんとして欲(ほ)すれば、必ず身(み)を以(も)ってこれに後(お)くる。ここを以(も)って聖人(せいじん)は、上(かみ)に処(お)るも而(しか)も民(たみ)は重(おも)しとせず、前(まへ)に処(お)るも而(しか)も民(たみ)は害(がい)とせず。ここを以(も)って天下(てんか)は推(お)すことを楽(たの)しみて厭(いと)わず。その争(ま)わざるを以(も)って、故(ゆ)に天下(てんか)能(よ)くこれと争(ま)うことなし。

現代語訳

大河や海が幾百もの谷川の水を集めて河川の王となっているのは、常に下流にあってへりくだっているからである。だからこそ河川の王となれるのだ。そこでもし民衆の上に立とうとするならば、必ず謙虚な物言いで人々にへりくだり、民衆の前に立とうとするならば、必ず自分の身を人々の後にするべきだ。だから「道」を知った聖人は、民衆の上に立っても彼らの重荷とならず、民衆の前に立っても彼らの邪魔とはならない。そうやって天下の人々は彼を喜んで指導者として推戴し、誰も嫌がる事が無い。他人を押しつけて指導者になろうとする訳ではないから、誰も彼と争おうとする者がいないのだ。

雑感

争わないそれも力だという非暴力主義を、第66章で歌う。「物事に成功して大きくなれるためには、低く謙虚にすることを意識しなさい」と老子が示唆しているが、社会では、知らずに高い地位に物事を用意して設定している者である。いろいろな視点で世の中に存在している。個人の生活や人生も同じなのである。

何かあるとき、まず自分のことを考えるべきである。

友人が少ないと嘆く前に、自分が知らずに高い位置にいないかを注意しよう。

仕事が行かなく心配する前に、自分が低く謙虚でいるのかを考えてみよう。

自分が貧乏だとあきらめる前にそれでも生かされている原点への感謝の心が自分にあるかを静観してみよう。

自ら低く謙虚であれば、すべてが大河のようにいろんな物事が自然と集まる自分自身になれる可能性を老子が言っている。高みから低みへと水が流れるのは、コノ世の法則である。

老子は、私心が有ればあるほど自分の思う通りにはならないと考えている。何をしたいと思えば思うほど何もできなくなる。皆が私欲を追い求めて人々と争うことになれば、誰も何も得られなくなる。逆に、誰も人と争わず、平然として何もせず落ち着いていれば、時には何かを得られるかもしれないと老子が示唆している。

(胡金定)

会員からの「特別ミニ講演」から

アダムとエバの罪の物語

創世記には、「人間の罪」を語る物語が残されています。アダムとエバは人間の原型（プロトタイプ）であり、二人が犯す罪は全ての人間に共通する経験と言えます。誰かとの約束を破りながら、責任を回避しようとする。「禁じられた木の実」の物語を通し、私たちは、これらを自身の経験と重ね合わせます。人間全てに共通する「罪の本質」であるのです。登場人物は「アダム」と「エバ」そして「最も賢い生き物」とされる「蛇」が登場します。ここで「抜粋」を紹介します。

主なる神は、東の方の「エデンに園」を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいでさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいでさせられた。主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。

主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。

主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう／まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。

人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりにはなかった。主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてはいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人は「いちじく」の葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。

その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」神は言われた。「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」主なる神は女に向かって言われた。「何と何をしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたので、食べてしまいました。」

主なる神は、蛇に向かって言われた。「このようなことをしたお前はあらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で呪われるものとなった。お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕きお前は彼のかかとを砕く。」

神は女に向かって言われた。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め彼はお前を支配する。」神はアダムに向かって言われた。「お前は女の声に従い／取って食べるなど命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前に対して土は灰とあざみを生えいでさせる野の草を食べようとするお前に。お前は顔に汗を流してパンを得る土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に戻る。」

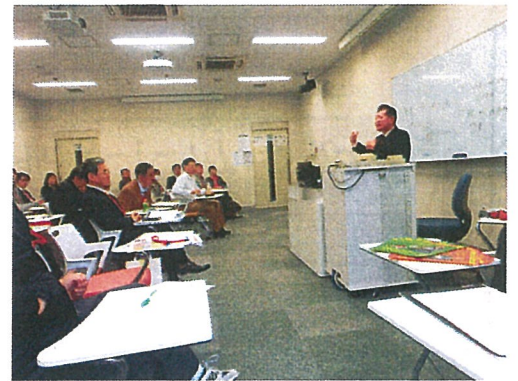
アダムは女をエバ（命）と名付けた。彼女がすべて命あるものの母となったからである。主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた。主なる神は言われた。「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた。

「エデンの園」は、聖書によればチグリス・ユーフラテス川の水源地のあたり。

アダムは「女がすすめた」と女のせい、しかも「あなたが共にいるようにした」と、最後は神のせいになります。同じように、女は女で言い訳をし「蛇にだまされた」と、蛇のせいになります。蛇にはなぜ足がないのか。それは「人をだましたから」で、人のかかとかみつくのも「呪われたせい」となっています。

女の「産みの痛み」、男の「額に汗して働く痛み」、また「なぜ男が女を支配するようになったか」が示されていますが、「人はなぜ神に逆らう存在になったのか」「アダムを追い出した神とは何なのか」「きらめく剣の炎」など、興味深い思索の一時が過ごせそうです。

（部田哲男）



「老子会」アンケート集計表

Q 1 今回の勉強会のご感想・ご意見を教えてください（良かった点、改善して欲しい点、学びになったこと、もっと聞きたかったことなど）

注：それぞれの文章の後にある数字は、集約した意見の人数です。

- ①メンバー発表の「聖書」について良かった。更に詳細な話の展開を期待する。 3
- ②東西の思想、思考パターンの差異が有り、理解出来た。 2
- ③「聖書」について、宗教哲学ではなく、風土記、地方誌であると認識している。 1
- ④「老子会」勉強会はとても良かった。クイズも有り興味津々、更に歴史と精神性を学びたい。パワーポイントの活用は大変有効的だ。「雑感」が凄い。 7
- ⑤今後は低姿勢で臨みたい。 1
- ⑥「老子」一流の逆説を学び、良かった。「無為とは争わない事」、「自然体である事」意味深長の言葉と自覚した。 2
- ⑦無回答 1

Q 2 今後の老子勉強会に対するご希望（何でもいいので、ご希望を書いて下さい）

- ①中国の思想家は自身が働いたことが有るのか否か？を教えてください。 1
- ②メンバーが取り組んでいる勉強の成果を順次発表していけば、「老子会」勉強会も活性化するだろう。 1
- ③現状のままで結構です。→改革を期待せずか？現状満足、容認か？ 1
- ④日程・会場の変更を希望する。第1、3土曜日に、ではどうか？ 1、東京で1
- ⑤更に時間革命を期待する。参加者が自身の感想を述べ、自己紹介も含めて相互に意見具申をしては？ 1
- ⑥「不爭謙下」自身への教訓、自身の学びとしたい。 1
- ⑦マンガ本の上梓を期待する。
- ⑧無回答 5

藤田憲一理事からのコメント

Q 1 に関して

- 1. メンバーの発表について、時間的に制約があるのは先刻承知のことだが、その内容から判断して、更に時間が必要と思われる。
- 1. 「聖書」の新たな位置づけ、評価、認識が、発表によって更に一重明らかになった。→宗教的原典ではなくて、風土記か地方誌である、との認識は現代人にとって、新たな一面を明確にするものと歓迎する。
- 1. 学びについて、今後の自身の学ぶ姿勢を“低姿勢”と、謙虚な言葉を述べている。少しこの意味が分かり辛い感がある。
- 1. 「老子会・勉強会」はとても実になり、興味が湧く時間だし、特に先生の講義では、「雑感」とのテーマを掲げて発表されているが、これは決して“雑”なんていう言葉で表せないし、“雑”という意味内容は、改めて種々雑多、様々な内容、意味する複雑さ、深みを十二分に感じさせる「雑感」である。

Q 2 に関して

- 1. 全体的に言って、時には思い掛けない内面の思考を吐露してくれる人がいるものだ、という感想を懐いた。中国思想家の働かず・云々
- 1. 勉強会に参加している会員が順次自身の成果を発表する機会、時間を割り当てることを期待している人が居る。が、実際運営上では不可能かな？と。
- 1. 同じく、会場を東京でも開催を期待、又日程の変更も提案有り。が、これも実質的には無理があると思える。1回/月がベストであり、もしそれ以上のモノを期待するならば、それは自身が取り組むべき課題だと考える。
- 1. Q 1では、一人が無回答だった。Q 2では更に多くて5名が無回答であった。先生が提案している「改善や改良への希望」が、参加者にはよく理解されていないのではあるまいか？更には、現場教室に出席し、只先生の講義を聞くだけで満足している人が多いのではないかと？積極的に参加意識を高め、自身を高め昇らせたいと願っている人達がどれだけ居るのか？が今後の発展・拡大のキーだと承知している。
- 1. 今回の参加者は33名だと聞いたが、アンケートの回収は13名のみだった。講義の後で短時間の内に自身の考えや意見などを纏めるのは少し無理があるのでは？無いだろうか？
- 1. 全体的に言って、本「老子会・勉強会」は、発足して足掛け5年になる。昨年に新たな大きな一歩を踏み出して、今日に至った。



藤田憲一さんは、天満橋北詰で生を受け、育ちも大阪で造幣局は小学の校区だった。その小学校は、花菱アチャコが出身で、在校中で一度だけ来学したことがあり、又「織田作」の小説「わが町」の運動会のシーンを、時の売れっ子であった、南田洋子も来学。一緒にロケに参加したそうです。

後に、阿倍野に移り、約5年間を過ごし、大学に入学した年に吹田市に転居。その後、現在の住まい、城東区に移住されています。

最初の就職先が東京本社勤務。約4年弱は歌舞伎座の直ぐ傍で、慣れない仕事でしごかれ、やがて大阪支店に転勤したことで、その後の人生の大きな転機になったそうです。

現在、自身が起業した会社が25周年、事務所を大手前の現住所に移転して、早や1

7年が経過しています。

城東区で町会の役員を23年間、そして管理組合の理事長も経験し、第一回の大規模修繕の委員長も、今は3度目の修繕期に取り組みられています。そうした関わり、経験からサークルの代表としても活動。大阪市とコラボした地域のボランティア「花いっぱい運動」の一環で花の維持管理を行い、市から表彰を勝ち取ったこともありました。

事務所がある大手前でも、数年前から町会長と商店会の会長を引き受けられ、中央区商店会連合会の理事もされています。仕事の業界では、昨年11月「日本乾燥野菜協会」の副理事長に就任（任期2年）。

同じく事務所の管理組合では、3度目の理事長を昨年度努められました。又、城東区で「民主音楽協会」の地域責任者としても活躍されています。

各方面で重責を担われている藤田さん。「各人との交流を通し、今後も人脈の拡大に精力的に取り組んでいきたい」と話されています。「老子会」には、2016年4月から参加。

＜老子会の皆さんへ＞

「老子会」の勉強時間は、難しい内容であり、シッカリと取り組まなくては決して自身の血肉と為り得ないと感じているが、だからこそ！ 従来に無い新しい挑戦であると、承知しているところです。

人間は人間の中でこそ！ 磨かれ鍛えられるって言う箴言は、生き生きと躍動しており、自身の姿勢こそ！が、その大いなる目的を達せられる事に至ると信じたい。世間一般には、シンドイことは遣りたくない、楽をしたい、楽して徳と福を得たい、なんて言う人達が、周囲には多く存在するが、シンドイ事と幸福感は表裏一体である、という思想が日本の今後の道筋には大変重要な視点ではあるまいか？と自問自答しているところ。

「老子会」は、胡先生を中心に益々充実し、発展拡大を遂げていくと確信します。「老子会」は、永久に不滅です。という信念で関係者一同、心を一にして取り組んでいくべきであると思っている。その一人になって参りたいと、決心している今日この頃です。

最後に一言、胡先生のお人柄で、月一回の勉強会に参加していますが、我々はそのご好意に甘えたり、軽く感じたりすることの無いように、特に役員に任せられた我々は、心して事に当たって参りたいと思います。

1月度「老子会」のご報告

老子会の皆様には、いつもご協力頂きありがとうございます。

1月度の老子会は若者の出席が目立ちました。「新しき世紀を創るものは青年の熱と力」と言われるように若い人の台頭が期待されます。33名の参加者で学び合いました。部田講師は、「イブ&エバ」の話があり、聖書は古文書との認識で展開されました。胡金定先生の「老子」六十七章の講義では、「“不爭謙下”の徳を為政者は持つべきなり」とのお話に、受講者は強く共感しました。交流会は26名参加して頂きました。新年でもあり大いに盛りあげられました。

2月度も、皆様ご多忙のことと存じますが、お繰り合わせの上ご出席頂きます様よろしくお願い致します。

寒さ厳しい折、ご自愛くださいませ。

今後の「老子会」のご案内

第50回老子会は 3月9日(金)～10日(土) 学外一泊研修「坂本龍馬 生誕の地を訪ねて」(詳細は別紙)

第51回老子会は 4月21日(土)15時～甲南大学6-33教室で実施。◇ 交流会18時30分～

第52回老子会は 5月12日(土)15時～甲南大学6-33教室で実施。◇ 交流会18時30分～

(石井政 事務局長)



老子会

〒658-8502

神戸市東灘区岡本8-9-1

甲南大学 国際言語文化センター 胡金定研究室

電話: 078(435)2353

FAX: 078(435)2545

E-mail kokintei@center.konan-u.ac.jp